

『支える vs 寄り添う & 会話 vs 対話』～ 生活姿勢への提供の場 ～

2025 年 9 月 21 日午前は、 インターナショナル・スクールのクリスチャン・アカデミー・イン・ジャパン: Christian Academy in Japan(CAJ)のキャンパス内にある KBF に wife と出席した。(画像)

『忠実な思慮深い管理人』(ルカの福音書第 12 章 42 節)

『初めに、ことばがあった。』(ヨハネの福音書第 1 章 1 節)

『ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。』(ヨハネの福音書第 1 章 14 節) が、今回の復学となった。

筆者の生涯に強い印象を与えたのは、 母校の鵜鷺小学校(鵜峠と鷺浦の間に位置する)の卒業式で、来賓が言った言葉『ボーイズ・ビー・アンビシャス』(boys be ambitious)である。札幌農学校を率いたウィリアム・クラーク(1826-1886)が、その地を去るに臨んで、馬上から学生に向かって叫んだと伝えられている言葉である。クラーク精神が、内村鑑三(1861-1930)、新渡戸稲造(1862-1933)を生んだ。筆者の読書の原点は、南原繁(1889-1974)、内村鑑三、新渡戸稲造、矢内原忠雄(1893-1961)である。

人生は開いた扇のようである。人生における出会いは、出会った時に受ける影響だけに留まらず、20 ～ 30 年後に影響してくることがある。例え、良い出会いであっても環境が整わないと大成しない。連鎖反応によりこれら 4 人の人物(南原繁 → 新渡戸稲造 → 内村鑑三 → 矢内原忠雄)の膨大な著作に向かい、彼らの思索の中に分け入った次第である。筆者が『がん哲学外来』で語るのは読書遍歴(内村鑑三・新渡戸稲造・南原繁・矢内原忠雄)で学んできた先達人の言葉である。まさに、『言葉の処方箋』である。

一般的ながん相談やセカンドオピニオン相談ではなく、対話型外来の『がん哲学外来』を自ら選択して訪れられる。30 分から 1 時間程度のわずかな面談時間でさえ満足し、快活な笑顔を取り戻して患者・家族は帰られる。『がん哲学外来・カフェ』は、『支える vs 寄り添う & 会話 vs 対話』の違いの『真剣な学びの場』で、生活姿勢への提供の場ともなろう。

